

上室性頻拍を契機に発症し血栓回収療法が奏功した 小児心原性脳梗塞の一例

林 仁美¹⁾ 藤田 貴子¹⁾ 井原由紀子¹⁾
山口 拓洋¹⁾ 石井 敦士¹⁾ 宮本 辰樹¹⁾
井手口 博¹⁾ 井上 貴仁¹⁾ 福本 博順²⁾
井上 亨²⁾ 安元 佐和³⁾ 廣瀬 伸一⁴⁾
永光信一郎¹⁾

¹⁾ 福岡大学医学部 小児科

²⁾ 福岡大学医学部 脳神経外科

³⁾ 福岡大学医学部 医学教育推進講座

⁴⁾ 福岡大学医学部 総合医学研究センター

要旨：小児の脳梗塞はもやもや病などの血管の形成異常に起因することが多く、頻拍発作後の小児脳梗塞は稀である。今回 WPW (Wolff-Parkinson-White) 症候群による発作性上室性頻拍 (paroxysmal supraventricular tachycardia: PSVT) 後に脳梗塞を発症し、血栓回収療法が奏功した小児例を報告する。症例は生来健康な6歳男児。6日間持続する腹痛と嘔吐、動悸を主訴に当科を受診した。心拍数 280/分と頻脈を認め PSVT の診断で ATP (adenosine triphosphate) を投与した。洞調律に回復後の心電図で WPW 症候群と診断した。診察所見で肝腫大があり、血液検査では BUN 上昇と線溶系亢進および BNP 上昇を認めた。胸部 X 線検査では心拡大 (Cardio-Thoracic Ratio: CTR67%) と胸水貯留を認め、心エコー検査で心収縮能低下がみられ心不全を呈していた。入院翌日に、突然の意識障害と右不全片麻痺が出現した。頭部 MRI (magnetic resonance imaging) 検査で左中大脳動脈領域の脳梗塞所見を認めた。脳神経外科と連携し、発症約4時間で血栓回収療法を行った。術後より右不全片麻痺は改善し、発症から18日後に後遺症なく退院した。小児脳梗塞に至る PSVT の報告例は少ない。低年齢の PSVT では動悸の訴えが難しく、頻拍発作の持続期間が5～7日と長い症例が多い。また、嘔吐などの消化器症状を呈し、脱水症から脳血流低下をきたす可能性がある。心原性脳梗塞の場合は発症早期の血栓回収により良好な転帰が得られる可能性が高く、発症早期は積極的に血栓回収療法を検討すべきである。

キーワード：WPW 症候群、発作性上室性頻拍、心不全、脳梗塞、血栓回収療法